

母親による子どもの心の理解

児童学部児童学科 菊野春雄・中野香苗

抄録：本研究の目的は、母親の心の理論にどのような個人差があるのかを検討すること、さらに子どもの心の読み取りの得意な母親と苦手な母親の心の読み取りの差は、どのような違いが見られるのかを検討することであった。その結果、子どもの心を推測することが苦手な母親は、子どもの目や表情から気持ちを推測する傾向が強いことが示された。しかし、それ以外の目・鼻・口・耳・腕・脚など他の身体部位について注意を向けることが少ないことが明らかとなった。これらの結果は、母親の心の理論の個人差は、子どもの身体部位の変化の読み取りが重要であることを示唆している。

キーワード：心の理論、子ども、認識、育児不安、個人差

問題と目的

現在、母親による子育て不安が深刻な問題になり、多様な形で子育て支援が行われている。その際に育児不安を抱える母親にどのような支援が可能なのであろうか。

育児不安を生じる原因の一つに、母親による子どもの心の状態の理解ができないことが考えられる。母子関係がスムーズに行くためには、母親が子どもの気持ちを汲み取ることが重要であり、母親が子どもの心を理解できないことは子育てにとって大きな問題になるだろう。しかし、母親が子どもの気持ちを認識することは、一般的に予想されるよりもかなり難しい心理的プロセスであることが示唆される (Keating & Heltzman, 1994)。それでは、子どもの心を読み取る母親に個人差があるのであろうか。なぜ母親は子どもの気持ちを理解できないのであろうか。

心を理解するメカニズムについては、これまで心の理論 (Theory of Mind) のテーマの中で研究がおこなわれている (Gopnik & Astington, 1988; Kikuno, Mitchell, & Ziegler, 2007; Perner, Frith, Leslie, & Leekman, 1987; Mitchell, 1997;

Mitchell & Kikuno 2001; Wimmer & Perner, 1983)。これらの研究から、母親が他者の心を推測する際に、心の理論というメカニズムを用いて他者の心を推論していることを示唆される。

1. 心の理論の個人差

それでは、心の理論に個人差があるのであろうか。心の理論に個人差があることが多くの研究から示唆される。まず、人間の心の理論に比べチンパンジーの心の理論は十分に精緻化されず、他者の詳細な心の推測が困難であることが示唆される。また、乳幼児を参加児とした発達研究では、心の理論は4歳頃獲得されることが報告されている (Gopnik & Astington, 1988; Perner et al., 1987; Wimmer & Perner, 1983)。リーダーシップを持った子どもほど、心の理論は精緻化されている (Keating & Heltzman, 1994)。これらの結果は、年齢が増加することにより心の理論を獲得している子どもと心の理論を獲得していない子どもがいることを示唆している。また、Baron-Cohen (1995) の自閉症の心の理論仮説では、自閉症児は心の理論が十分に機能していないことを示唆している。また、聴覚障害を持つ子どもは心の理論

の獲得が遅れることも報告されている (Peterson & Siegal, 1995)。これらの結果は、すべての人が個人差なく心の理論を獲得しているわけではないことを示唆している。そして、母親の心の理論にも個人差があり、その個人差によって子どもの気持ちの認識に差が出るのではないかと予想される。

2. 心の理論の獲得に影響する要因

心の理論が生得的に保持されているのではなく、経験を通して獲得されていくことも多くの研究から示唆されている。たとえば、きょうだい数や養育の仕方が心の理論の獲得に影響し、きょうだい数が多いほど、心の理論の獲得が優れることが示唆されている (Perner, Ruffman & Leekam, 1994)。また、子どもの育つ文化によって、心の理論の獲得に1年から2年の差がみられることも報告されている (Wellman, Cross & Watson, 2001)。これらの結果は、それぞれの育った環境、養育態度、文化によって心の理論の発達が異なり、個人差が生じる可能性があることを示唆している。

それでは、母親が子どもの気持ちを理解することは、単純で容易な処理なのであろうか。子どもの行動は大人ほど複雑ではなく、対人関係を長年経験してきた大人が子どもの気持ちを推測することはそれほど難しくないように思われる。しかし、いくつかの研究ではこの仮説は正しくないことが示唆されている。Keating and Heltzman (1994) は、子どもを参加児として、甘いジュースと苦いジュースを提示し、それぞれが甘いジュースであるかのように飲むように依頼した。そして、そのジュースを飲んでいる状況をビデオに撮り、大人にどの子どものジュースが甘いのかを識別するように求めた。しかし、ほとんどの大人が正しく判断できなかった。また、Lewis (1989) は幼児を参加児として、同様の実験を行っているが、大人は正しく判断できなかった。このことは、大人は必ずしも子どもの気持ちを正しく認識できないことを示している。

以上の研究から、子どもの心を理解するためには、「心の理論」が必要であり、「心の理論」には個人差があり、大人が子どもの気持ちを推測することは容易ではないと言えるだろう。すなわち、母親が子どもの気持ちを推測するとき心の理論が必要であり、母親が子どもの気持ちを理解することは大変難しいことであり、母親が子どもの心を推測する心の理論には個人差があることを示している。

3. 母親の個人差の原因

本研究では、母親の心の理論にどのような個人差があるのかを検討すること、さらに子どもの心の理解が苦手な母親はなぜ子どもの心を理解できないのかを明らかにしようとした。子どもの心を推測することが得意な母親と苦手な母親の差は、どのような処理の違いによるのであろうか。Baron-Cohen (1995) は、心の理論 (TOM) のモデルを提唱し、心の理解のメカニズムについてモデル化している。このモデルでは、相手の心推測するとき、相手の「視線」から情報を読み取り、心の理論を使ってその情報を処理していることが示唆されている。このことから、母親が子どもの心を理解するとき、子どもの行動のどの身体部位を観察するのかによって、子どもの気持ちの推測に差がみられるのではないかと推察される。

本研究では、視線情報処理仮説と冗長情報処理仮説の2つの仮説を設けて、心の読み取りの得意な母親と苦手な母親の心の読み取りの差は、どのような違いが見られるのか検討しようとした。Baron-Cohen (1995) は、相手の「視線」から他者の気持ちを推測していることから、視線情報の重要性を示唆している。視線情報処理仮説とは、子どもの心の読み取りの得意な母親は、目を注視し、そこから得られる情報についての詳細な変化を認識することにより、子どもの心を読み取る傾向が強いと仮定される。しかし、日常生活で、我々は口や手のわずかな動きから相手の気持ちを推測す

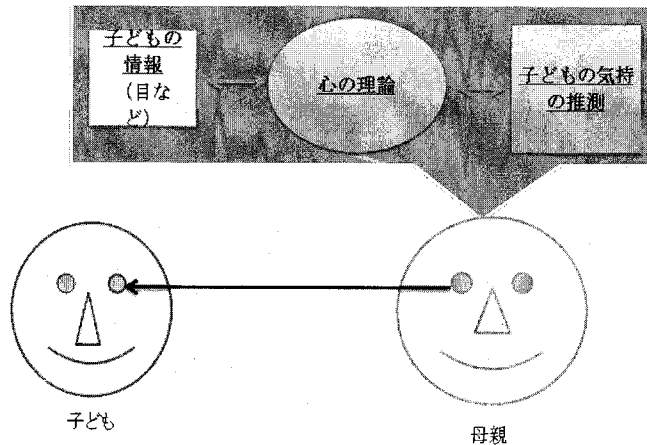


Figure 1 視線情報処理仮説

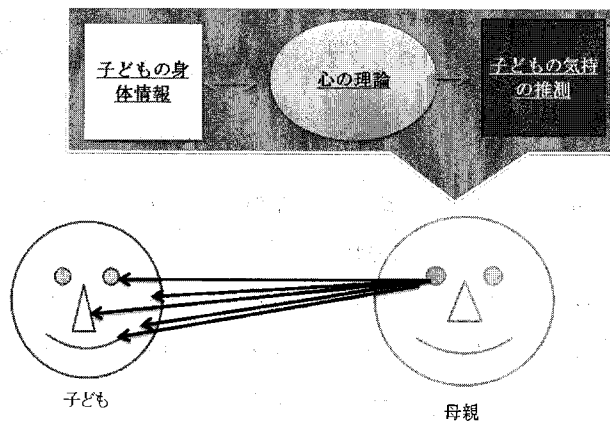


Figure 2 冗長情報処理仮説

ることが多い。そこで、もう一つの仮説（冗長情報処理仮説）として、子どもの心の読み取りの得意な母親は、視線以外のより多くの身体部位における変化を認識することから子どもの心を読み取りが優れるのではないかと仮定される。

方法

研究協力者：本研究の研究協力者は、5歳児の母親38名、4歳児の母親31名、3歳児の母親28名であった。

研究計画：本研究では、 $2 \times 3 \times 9$ の要因計画を用いた。第1の要因は母親の認識のレベルで、高認識者と低認識者が含まれていた。第2の要因は

母親の子どもの年齢で5歳児、4歳児、3歳児の3つの年齢が含まれていた。第3の要因は身体部位で、目、鼻、口、眉毛、表情、耳、腕、足、その他の9つの身体的部位が含まれていた。これらの要因の内、第1要因の母親の認識のレベルと第2要因の母親の子どもの年齢は協力間要因であり、第3要因の身体部位は協力者内要因であった。

質問紙：本研究で用いられた質問紙には、「子どもの気持ちの状態」と「子どもの各身体部位における仕草や行動から気持ちを予測できる程度」を印刷したものを用いた。具体的には、「子どもに隠し事があるとき」に母親が、子どもの身体部位で生じる仕草や行動からどの程度の認識できるのかを6段階の尺度で回答を求めた。各身体部

位とは、「目、鼻、口、眉毛、表情、耳、腕、足、その他」であった。

手続き：研究協力者である母親に質問紙を配布し、それに回答する形式で調査を行った。すなわち、「子どもに隠し事があるとき」に、母親が子どもの仕草や行動についてどの程度の認識できるのかを「目、鼻、口、眉毛、表情、耳、腕、足、その他の身体的部位」について6段階の尺度で回答を求めた。

結果

質問紙の尺度を認識得点として、認識得点の合計を算出し認識レベル得点とした。それらの得点

の内10点以下の者を低認識者、30点以上の者を高認識者とした。その結果、5歳児では、15名の母親を低認識者（平均1.90、標準偏差1.39）、15名の母親を高認識者（平均39.44、標準偏差4.55）であった。4歳児では、8名の母親を低認識者（平均3.56、標準偏差2.61）、17名を高認識者（平均37.28、標準偏差4.68）であった。3歳児では、12名を低認識者（平均2.08、標準偏差1.73）、14名を高認識者（平均39.07、標準偏差4.83）であった。

1. 高認識者と低認識者の認識

Table 1は、高認識および低認識の母親の認識得点についての平均値と標準偏差を、子どもの年

Table 1 低認識者と高認識者の認識度

	目	鼻	口	眉毛	表情	耳	腕	足	その他
5歳児									
低認識者	0.33 (0.72)	0.23 (0.62)	0.20 (0.56)	0.00 (0.00)	0.73 (1.16)	0.00 (0.00)	0.07 (0.26)	0.00 (0.00)	0.33 (0.90)
高認識者	3.44 (1.50)	4.75 (0.45)	4.50 (1.26)	4.88 (0.34)	3.50 (1.37)	4.88 (0.34)	4.88 (0.34)	4.88 (0.34)	3.75 (2.11)
4歳児									
低認識者	1.06 (1.15)	0.25 (0.71)	0.31 (0.88)	0.25 (0.71)	0.63 (0.92)	0.00 (0.00)	0.25 (0.71)	0.31 (0.88)	0.50 (0.93)
高認識者	3.56 (1.52)	4.68 (0.77)	4.41 (1.00)	4.74 (0.56)	3.35 (1.17)	4.91 (0.26)	4.69 (0.58)	4.76 (0.56)	2.18 (2.48)
3歳児									
低認識者	0.92 (1.16)	0.00 (0.00)	0.17 (0.58)	0.00 (0.00)	0.83 (1.27)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.17 (0.58)
高認識者	3.64 (1.74)	5.00 (0.00)	4.50 (1.29)	5.00 (0.00)	3.00 (1.57)	5.00 (0.00)	5.00 (0.00)	4.79 (0.80)	3.14 (2.32)

注 括弧内の値は標準偏差を示す。

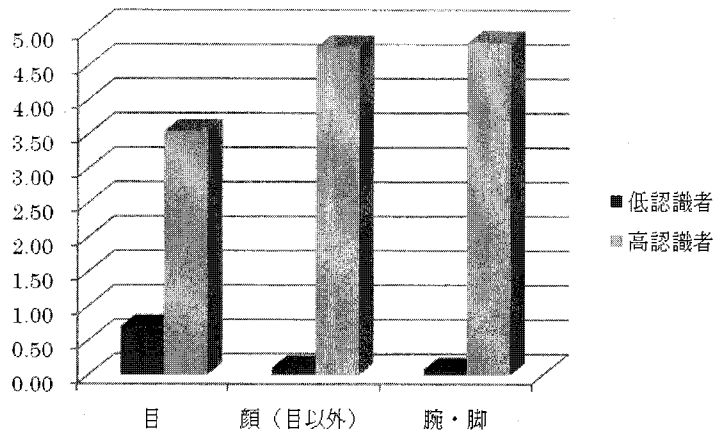


Figure 3 目, 目以外の顔, 腕や足への認識

年齢別に示したものである。これについて、3 (年齢) × 2 (認識レベル) × 9 (身体部位) についての混合型の分散分析を行い、以下のような結果が得られた。認識レベルの主効果は有意であり ($F(1, 91) = 760.54, p < .01$)、低認識の母親よりも高認識の母親の方が、認識得点は高かった。また、身体部位の主効果が有意であった ($F(8, 728) = 10.80, p < .01$)。目と表情に比べ鼻、口、眉毛、耳、腕、足の部位で認識得点が高かった。認識レベル × 身体部位の交互作用についても有意であり ($F(8, 728) = 23.57, p < .01$)。目、表情、その他では低認識者と高認識者の認識レベルには有意差は見られなかったが、鼻、口、眉毛、耳、腕、足では低認識者よりも高認識者の認識レベルが有意に高かった。しかし、年齢の主効果 ($F(2, 91) = 0.02$)、認識レベル × 年齢 ($F(16, 728) = 0.80$)、年齢 × 身体部位 ($F(2, 91) = 2.08$) と認識レベル × 年齢 × 身体部位 ($F(16, 728) = 0.94$) の交互作用は有意でなかった。

2. 目, 目以外の顔, 腕や足への認識

次に、認識得点を目、目以外の顔の部位、腕や足の顔以外の部位に分けた。Figure 3 はそれらを図示したものである。これについて、2 (認識レベル) × 3 (身体部位) の分散分析を行った。そ

の結果、認識レベル ($F(1, 80) = 1614.34, p < .01$) と身体部位の主効果が有意であった ($F(2, 160) = 4.50, p < .05$)。また、認識レベル × 身体部位の交互作用も有意であった ($F(2, 160) = 37.28, p < .01$)。すなわち、目における低認識者と高認識者の差に比べ、目以外の顔の部位での低認識者と高認識者の差の方が大きいことが認められた。また、目における低認識者と高認識者の差に比べ、腕と脚の部位での低認識者と高認識者の差の方が大きいことが認められた。

考察

本研究では、主に以下のような結果が得られた。目と表情に比べ鼻、口、眉毛、耳、腕、足で認識得点が有意に高かった。低認識者と高認識者の認識の差は、目よりも鼻、口、眉毛、耳、腕、足で有意に大きかった。以下では、これらの結果について考察したい。

1. 子どもの心のサインに気づくために母親が用いる情報

まず、本研究では目と表情に比べ鼻、口、眉毛、耳、腕、足で認識得点が高いことが認められた。この結果は、子どもが何かを隠しているときに、

母親は目よりも鼻、口、眉毛、耳、腕、足での行動から推察していることを示唆している。Baron-Cohen (1995) では、目の情報から心の状態を推測することが示唆されている。

なぜ、母親は子どもの心を推測するのに、目よりも他の身体部位の情報を利用するのであろうか。人の気持ちを理解するためには、基本的には目についての情報を用いるが、より複雑な心の状態を理解するためには目以外の多くの身体部位の情報を認識する必要があるだろう。そのため、目以外の情報に注意を向けるのではないだろうか。たとえば、隠し事があるが、それを母親から隠す場合、目では何もなかったような表情をするのかもしれない。そのため、大人でも一つの身体的部位だけではその子どもの気持ちを推察することは難しいであろう。たとえば、Keating and Heltzman (1994) は、子どもの顔から子どもが嘘をついていることを認識することが難しいことを示唆する研究結果を報告しており、目の情報だけでは子どもの微妙な気持ちを推測することが難しいことが示唆される。そこで、母親は目以外の情報、たとえば鼻や口などの情報を使って子どもの心の状態を推察するのではないだろうか。そのため、母親は目以外の情報を使って子どもの心を推測しているのではないだろうか。

2. 母親の子どもの心の認識における個人差

それでは、低認識の母親と高認識の母親でどのような差が見られたのであろうか。Figure 4 Figure 5 は高認識と低認識の母親がどの情報を使っているのかを色の濃淡で示したものである。本研究では低認識の母親よりも高認識の母親の方が目の情報で子どもの心のサインを有意に認識することが認められた。この結果は、視線情報処理仮説と一致する結果である。視線情報処理仮説では、子どもの心の読み取りの優れた母親は、目を注視しそこから得られる情報についての詳細な変化を認識することにより、子どもの心を読み取る

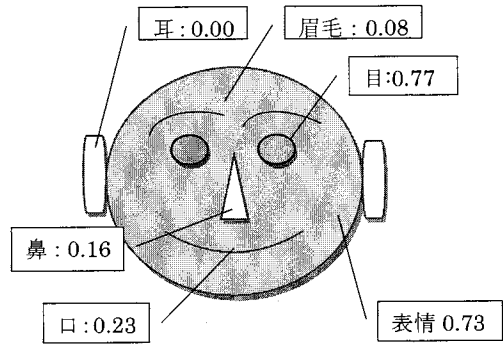


Figure 4 低認識者の顔の部位への注意

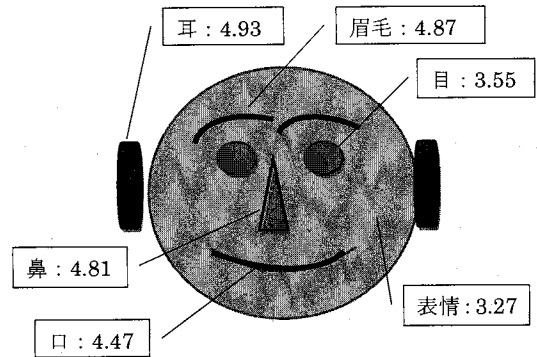


Figure 5 高認識者の顔の部位への注意

傾向が強いと仮定される。

さらに、目における低認識者と高認識者の差に比べ、目以外の顔の部位での低認識者と高認識者の差の方が大きいことが認められた。また、目における低認識者と高認識者の差に比べ、腕と脚の部位での低認識者と高認識者の差の方が大きいことが認められた。これらは、冗長情報処理仮説をも支持する結果である。高認識の母親と低認識の母親の違いは、目についての認識の差だけでなく、目以外の身体部位での認識による差が原因であることを示唆している。すなわち、低認識の母親は、「目」の情報から、子どもの心の状態を推測・理解しようとするが見られることを示唆している。他方、高認識の母親は、「鼻や耳、腕や足など」の情報から子どもの心の状態を理解しようとするが見られる。

なぜ「目」の情報よりも、「鼻や耳、腕や足など」の情報で高認識の母親と低認識の母親におい

て差が大きくみられたのであろうか。この理由として、Keating and Heltzman (1994) が示唆するように子どもの気持ちを読み取るのは難しいことがあげられるだろう。本研究では3歳から5歳の子どもの心の状態を母親がいかに理解するかを調べている。乳児に比べ幼児の心の表出はより複雑になり読み取りにくいのではないだろうか。すなわち、3歳から5歳児の場合、目からの情報だけでは子どもの心の状態を推測することは難しいのであろう。心の理論の研究では、4歳頃に心の理論が獲得し (Gopnik & Astington, 1988; Perner et al., 1987; Wimmer & Perner, 1983), 子どもは自分の心の状態を他者に知られないように行動を行う傾向がある (Keating & Heltzman, 1994)。そこで、母親が、目だけの情報を使って子どもの心を推測しようとしても、子どもの詳細な心の状態を理解することは難しい。たとえば、子どもは自分の気持ちを推測されないように笑顔の表情を示したり、年齢が増すほど無表情を装うなど発達的な変化が見られる。そこで、母親は目以外の情報を使って、子どもの心を読み取る必要があるの

Table 2 母親が子どもの気持ちを理解するための情報 (目と表情)

部位	行動	3歳	4歳	5歳
目	視線を合わせない	7	8	4
	目が笑っている	2	1	2
	親の顔を見る	1	1	1
	きよろきよろする	0	1	0
表情	笑う	7	2	3
	不安そうな顔をする	2	3	2
	笑顔が消える	0	0	1
	緊張する	1	3	1
	無表情	0	1	1
合計		20	20	15

であろう。すなわち、「鼻や耳、腕や足など」の情報の情報を読み取る必要があるのであろう。

Table 2 と 3 は、母親が子どもの気持ちを理解するための行動としてどのようなものがあるのかを記述したものをまとめたものである。この結果から、低認識者が子どもの心の状態を推測するために使っている目や表情での情報は年齢とともに減少している。しかし、高認識者が使っている目・鼻・口・耳・腕・脚の情報は年齢とともに増加している。すなわち子どもの詳細な心の状態を知る

Table 3 母親が子どもの気持ちを理解するための情報 (目・鼻・口・耳・腕・脚)

部位	行動	3歳	4歳	5歳	
鼻	膨らむ	0	4	1	
	口	無口になる	0	3	1
		嘘をつく	0	0	1
		とがらす	0	1	1
		声が小さくなる	0	0	1
		にやにやする	1	0	1
		よくしゃべる	0	2	0
		もごもごする	1	1	0
	口をすぼめる	2	0	0	
	耳		0	0	0
腕		腕を後ろで組む	1	0	1
		腕を動かす	0	4	1
	指を動かす	0	2	0	
脚	動く	0	1	0	
	横に揺らす	0	1	0	
合計		5	19	8	

ためには、目だけでなくそれ以外の情報に注意を向けることが重要であることを示唆している。

まとめ

本研究では、子どもの気持ちを理解することが苦手な母親はなぜ子どもの気持ちを推測しにくいのかについて身体部位への注意という観点で調べた。その結果、子どもの心を推測することが苦手な母親は、子どもの目や表情から気持ちを推測する傾向が強いことが示された。しかし、それ以外の目・鼻・口・耳・腕・脚など他の身体部位について注意を向けることが少ないことが明らかになった。この研究結果は、発達相談等で母親に対する子どもの心の理解やコミュニケーションにおけるアドバイスになんらかの示唆を与えるのではないかと考えられる。

今後の課題として、年齢や性格など子どもの個人差の要因や母親の性格や育児不安の要因を入れてさらに展開する必要があると思われる。

- 1) この研究は文部省科学研究費補助金によって行われた(研究課題番号 18500208)。
- 2) この研究の一部は、日本乳幼児教育学会第 18 回大会(2008)にて発表した。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (1995) *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. The MIT Press.
- Gopnik, A. & Astington, J. W. (1988) Children's understanding of representational change, and its relation to the understanding of false belief and the appearance-reality distinction. *Child Development*, 59, 26-37.
- Keating, C. F. & Heltman, K. R. (1994) Dominance and deception in children and adults: Are leaders the best misleaders? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 312-321.
- Kikuno, H., Mitchell, P. and Ziegler, F. (2007) How do young children process beliefs about belief?: Evidence from response latency. *Mind and Language*, 22, 297-316
- Mitchell, P. (1997) *Introduction to theory of mind: Children, Autism and Apes*. Arnold. London.
- Mitchell, P. & Kikuno, H. (2001) Reconstruction of Representation and Belief. In Mitchell, P., & Riggs, K. J. (Eds) *Children's Reasoning and Mind*. Psychology Press; Hove
- Perner, J., Frith, U., Leslie, A. M. & Leekman, S. R. (1987) Explanation of the autistic child's theory of mind: Knowledge, belief and communication. *Child Development*, 60, 689-700.
- Perner, J., Ruffman, T., & Leekman, S. (1994) Theory of mind is contagious: You catch it from your dibs. *Child Development*, 65, 1228-1238.
- Peterson, C. C., & Siegal, M. (1995) Deafness, conversation and theory of mind. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 36, 459-474.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001) Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 665-684.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.

Mother's Understanding of Children's Mind

Osaka Shoin Women's University

Haruo KIKUNO & Kanae NAKANO

ABSTRACT

The aim of this study is to examine whether there are individual differences of mother's theory of mind and how different is mothers who understand their children's mind easily from mothers who understand their children's mind difficulty. The result showed that the former mother paid their children's eyes, nose, mouth, ears, arm and legs whereas the latter paid attention to their children's eyes and expression. These results suggest that there are individual differences of mother's theory of mind to understand their children's mind.

Keywords: Theory of mind, Children, Understanding, Anxiety about child care, Individual differences